<table>
<tr><td>受賞者氏名</td><td>小林深吾（元大学院生）・丹羽郁夫</td><td rowspan="6"></td></tr>
<tr><td>所属</td><td>元人間社会研究科臨床心理学専攻・現代福祉学部
臨床心理学科</td></tr>
<tr><td>受賞年月日</td><td>2020 年 9 月 19 日</td></tr>
<tr><td>国内・国外</td><td>国内</td></tr>
<tr><td>授与機関等名称</td><td>日本コミュニティ心理学会</td></tr>
<tr><td>受賞名</td><td>2019 年度優秀論文賞</td></tr>
<tr><td>受賞（研究）内容詳細</td><td colspan="2">論文『仮設住宅入居者の視点から災害ボランティアとの関係性の意味づけが変化するプロセスに関する質的研究：東日本大震災における長期的な心理社会的支援事例から』（2019 年,コミュニティ心理学研究, 23(2), 87-129）は、小林深吾（一般社団法人ピースボート災害支援センター）の法政大学大学院人間社会研究科における修士論文をもとにしています。丹羽は小林の修士論文の指導教員であり、これを学会誌に掲載するための改編のサポートをした第二著者です。
東日本大震災では、非常に多くのボランティアが支援活動をしました。しかしメンタルヘルスの専門家に比べると、非専門であるボランティアの支援活動の有効性についてはほとんどわかっていません。本論文の特徴は、ボランティアの支援活動に焦点を当てたことと、その有効性を被支援者の視点から調査したことです。具体的には、仮設住宅に入居している、孤立しがちな高齢者の方々に訪問したボランティアが、この方たちにとってどのような意味をもったのかについて調べました。このボランティアは仮設住宅での生活に役立つ情報紙を配達するために NPO から派遣された方たちです。調査では、12 名の仮説住宅入居者を訪問し、インタビューを行いました。調査の結果、ボランティアが専門家でないことによる対等性などが被災者の支援に有効であった点がいくつか明らかになりました。
第一に、入居者にとってボランティアの訪問が楽しみになっていました。長期間、定期的に訪れるボランティアの多くは入居者の方とお茶を飲みながら世間話をするような関係を築いていました。これは入居者の孤立を防ぎ、被災生活が長期間続くことによる二次的ストレスを緩和する効果をもっていることが考えられました。第二に、ボランティアは被災者にとってその体験を語りやすい対象となっていました。被災体験を語ることは被災者の側から自発的に行われたときに、トラウマを予防したり、軽減することが知られています。ボランティアに対しては、世間話からの流れで自然な形で被災体験が語られる傾向がありました。第三に、入居者の方がボランティアよりも年齢が上であることもあり、支援−被支援の立場が逆転することがみられました。入居者の方がボランティアのことを気にかけたり、助言をしたりすることが起きていました。被災者支援において、被災者は支援される側の弱者の立場に置かれがちですが、ボランティアに対しては人生の経験者として支援する側に立つことがありました。これにより被災者は他者を助ける力を自分自身がもっていることに気づきます。これをエンパワーメントと呼びます。
しかし、以上のような被災者と支援書との強い情緒的なつながりは被災者が過度に依存して、その要求が高まり過ぎてしまう危険性があります。それを防ぐために、ボランティアを受け入れ、派遣する側の組織が派遣前にオリエンテーションを実施し、派遣後に振り返りを行うなどのボランティア教育を行っていたことが役立っていました。</td></tr>
</table>